Osaka University Knowledge Archive

Title	19世紀前半のウィーンにおけるフォルテピアノ : 製作から音楽へ
Author(s)	筒井, はる香
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44121
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【27】

氏　　名	筒　井　はる香（つつい はるか）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学 位 記 番 号	第　17469　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	**19世紀前半のウィーンにおけるフォルテピアノ－製作から音楽へ－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授　根岸　一美 （副査） 教 授　山口　修　教 授　林　正則

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、19世紀前半のウィーンにおけるフォルテピアノをめぐって、楽器の製作状況から、楽器の構造、楽器と作曲家の関係、楽器と音楽作品の美的特質との関わりにいたるまで、総合的に論じた研究である。（横書　本文40字×36行設定99頁、参考文献表10頁、巻末資料44字×44行設定54頁）

本文は全5章からなる。第1章「ウィーンの鍵盤楽器製作家」では、18世紀末から19世紀初頭にかけてウィーンで活動していたピアノ製作家に焦点をあて、ギルド制度における彼らの身分や工房の組織、師弟関係を概観している。第2章「製作家ごとにみられる楽器の特色」では、シュタインとワルターを中心に、音域、アクション、張力、ペダル、さらに、そこから推測されるタッチや音色について考察し、各製作家のピアノが具体的にどのようなものであったかを探究している。第3章「フォルテピアノと作曲家たち」では、ベートーヴェン、フンメル、ヴェーバー、シューベルト、シューマンを取り上げ、彼らとウィーンのピアノならびにピアノ製作家たちとの関わりが論じられている。第4章「作品分析」では、作曲家と楽器との関わりが具体的に作曲や演奏実践の現場においてどのように作用していたのかについて、ペダル、音域、鍵盤感覚の3点をめぐって考察している。そして第5章「消えてゆく音の美学」では、シューマンの《アベッグ変奏曲》を取り上げ、当時のピアノフォルテの特質として、楽器全体が共鳴箱の役割を果たしていたために鍵盤から指を離しても音が瞬時に消えず、耳を澄ませば微かに鳴り続けているという現象に注目し、そこから得られる独自な聴体験についての美学を展開している。

巻末資料は、第1章のための基礎資料となっている、ヘルガ・ハウプト、ヘルムート・オットナー、マルタ・ノヴァク・クリンスケールほかの文献に基づいて作成された「1800年から1833年までのウィーンにおけるピアノ製作家のリスト」である。ここには、1）宮廷ピアノ製作家、2）市民のピアノ製作家、3）特権取得のピアノ製作家、4）資格取得のピアノ製作家、5）［以上の区分が記録上不可能な、身分不詳の］ピアノ製作家、6）ピアノ職人、そして7）ピアノ部品製造者の順に、計393人の氏名が掲げられ、それぞれ出生地と生没年または活躍した時期、伝記事項、住所、楽器製作に関する事項、師弟関係などの情報が簡潔に提示されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は19世紀前半のウィーンにおけるフォルテピアノの製作状況から、現代のピアノにおいては失われている、当時の楽器にのみ固有の構造的音響的特質をふまえた美学的考察にいたるまで、フォルテピアノという楽器とその音楽について、あらゆる角度から取り組もうとした論考である。まず、対象を 19 世紀前半のウィーンに限定することによって考察の観点を明確に示し、第１章から終章にむかって効果的な展開を示している点が高く評価されうる。第１章においては、先行研究を丹念に探ることを通じて、音楽が始まる場としての楽器の製作者やその工房について、十分に整理された形で情報を提示している。第２章では製作者ごとの楽器の特質について、楽器博物館や現代の楽器製作者を訪ねるなどのフィールドワーク的な作業をふまえた、実質的な解明を示している。第３章以下は、当時の作曲家たちの作品が、まさに当時の楽器によって演奏されることによってのみ明らかになる事柄を析出することにより、ピアノ音楽についての新たな知見を提供しており、同時代の楽器による演奏の意味について説得力のある考察を展開している。しかしながら、本論文には、若干の短所もある。例えば、全体の３分の１ほどの分量を占める「巻末資料」について、提示したのみで、その意味づけや今後の活用の可能性を示していないこと、重要な引用について邦訳文献のみに頼って原典を参照していない箇所があること、身体性や身体感覚についてもっと掘り下げが必要であること等、である。しかし、これらの問題は近未来のさらなる研究において解決が期待されうるものであり、音楽学にたいする本論文のすぐれた貢献の意義を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。